



巻頭言



附属図書館長 市村 孝雄

冬のある朝の図書館の情景です。卒業研究の提出期限が近づいた看護学部の4年生がコンピューターで「医学中央雑誌」を開いています。キーワードを入れて検索、ヒットした文献のリストをさっと流し読み。目当てのタイトルをみつけると“Medical OnLine”のフリートライアルに飛びました。全文が開き、すかさずダウンロード。研究室に持ち帰り、レーザープリンターの軽い音がひとしきりして、目の前に最新文献のコピーが現われました。一気に斜め読み。なるほどなるほどとしきりに納得。期待どおりの情報だったのでしょうか、やがてこの一文の表題と著者名が卒業研究の“参考文献”に挿入されました。この間、わずか30分。文献複写依頼もコピー代も3週間の待ち時間も不要でした。有料誌ではなかったのだから、読むのもダウンロードするのもフリーでした。これが、今や日本中の大学の日常風景となった電子ジャーナル活用術です。

一方、コンピューターといえばNECの重たいデスクトップが机に鎮座していた頃、電子ジャーナルはまだまだ夢物語でした。当時の最新情報といえば、MEDLINEのアブストラクト・データベースでキーワードサーチをして「別刷り請求はがき」を何枚も書き投函して待つこと3週間、千秋の思いで手に入れたものです。「請求ありがとう」や“With Author's Compliments”と手書きの添えられた別刷が届くと、著者をととても近くに感じたものです。もちろん、別刷りはたちまち書き込みとマーカーペンで多色刷りとなり、文字通り紙背に徹する熱い視線に焼かれたものでした。

さてさて、今やネットで釣りあげられてたちまち引用される文献、かつては著者から送り届けられてとことん熱い目にさらされた別刷、いったいどちらが幸せなのでしょう。この新春号に堤先生が寄せられたメッセージは、その答えを暗示してくれるかのようです。

さあ、あなたは、もう“Medical OnLine”を覗きましたか？ エルゼビア社のHealth Science分野500誌余りの“Subject Collection”をトライしましたか？ 図書館のホームページから一度トライしてみてください。21世紀の新しい潮流を伺い知るために。

メディカル オンライン ライブラリー ~ トライアル結果 速報

昨年12月、「メディカルオンラインライブラリー」の2回目のトライアルを実施しました。

今回のトライアルでは半期で前回の2倍近く、1,000件余りのアクセスがありました。(本報編集時)利用の特徴としては、本文閲覧が75%を占めており、2002年以降から2007年までの論文閲覧が圧倒的に多い状況でした。巻頭言でも触れられていますが、「医学中央雑誌」の論文検索と併用すると、より効率的な論文入手が出来るようです。附属図書館では、なお、引き続き、導入の検討をしていきたいと考えています。(町田)




 (寄稿) 図書館への思い

看護栄養学部看護学科 准教授 堤 雅恵

この原稿を書く私の傍らで、卒業論文作成の最終段階を迎えたゼミ生達が真剣な表情でパソコンに向かっている。彼女らがこれまでに読み終えた数十の文献がファイルに綴じ込まれ、テーブルの上に置かれている。文献にはあちこちに下線や書き込みがあり、しっかりと読んでいる様子が伺える。

私はいつも学生達に「多くの文献を読んだことを、ずっと先になってから誇りに思えるほどに読むのよ」と言っているが、文字離れの時代でもあり、学生の反応の善し悪しが年々気になってきている。「どうやら今年も学生達は私の言葉を素直に受け止めているようだ」と、今静かに喜びをかみしめている。欲を言えば、研究のために必要にかられて読む文献だけでなく、様々なジャンルの本を読んでほしいと思う。明確に表現できないが、読書でしか得られないものは確かにあるという気がしている。

私自身には、多くの本を読んだ時代がある。小学生であった6年間だ。当時の私は大変おとなしく、人と話すことが苦手であった。その頃の私を知っている人は、私が人前で話す仕事に就いていることに一様に驚く（実は中身はあまり変わってはおらず、授業の時などは少し緊張している）。運動神経も鈍く、外でドッジボールなどをして遊ぶのも好きではなかった。私にとって最も落ち着く場所は図書室であり、昼休みには必ず図書室で本を読んでいた。10分の休み時間でさえも図書室に向かうことがあり、5年生の時に教室が図書室の隣になって大変嬉しかったのを憶えている。

本のジャンルは問わなかった。図書室の各棚の端から端までの本を読破するのが楽しく、3日に1冊は読んでいたように思う。夏休みなどは読書三昧で、1日1冊読むこともあった。読書中はどうも本の世界に入り込み、名前を呼ばれても気づかないことが多かった。それほど本が好きであった。

ところが、どうしたわけか中学3年間はソフトボールに打ち込み、読書の時間がすっかり減ってしまった。県内の全ての大会で優勝した強豪チームであったため、練習は長く厳しく、部活から帰ると宿題を済ませるのがやっとであった。高校時代も、読んだ活字のほとんどが学習に関するものであり、読書といえるようなものではなかった。

そして大学時代、私は研究に関する文献をたくさん読んだ。疑問を解き明かすために文献を読む楽しさを知ったのはこの時である。ただ、現在のようには文献検索システムが整備されていなかった時代であったから、分厚い医学中央雑誌の抄録集を開いて文献を検索したものだ。最近の学生がいかに快適な環境で学んでいるか、本当にうらやましく思うが、かくいう私自身も、大好きな本をいつでも手にすることができ、また、研究に必要な文献を簡便な方法で検索できる幸せを享受している。

話は変わるが、私は平成12年4月からの3年間、図書館委員を務めさせていただいた。当時の最も大きな課題は、看護学部棟図書室における貸し出し時間の延長であった。看護学科はカリキュラム上、授業の空きが少なく、学生にとっては閉館時間内での文献検索が困難である場合が多かったのである。とりわけ、夕方に帰学した学生が翌日に備えて学習を行う実習期間においては、課題が大きかった。対応策として希望の文献を翌日本館で借りることのできる予約システムが準備されたが、学生が読む文献は翌日の学外実習に必要なものであったため、このシステムはほとんど利用されなかった。

実習には文献学習が不可欠であることから、夜間の貸出は、学生のニーズというよりも悲願に近い印象があった。学生達の意志で署名運動までが行われたが、予算等の課題があり、残念ながら叶えられなかった。それが、平成19年、セルフ貸出機の導入によってついに実現したのである。日曜日の特別利用も開始され、学習環境は飛躍的に改善した。本当に嬉しく、感謝の気持ちで一杯である。

山口県立大学に着任して10年、図書館職員の方々が、厳しい環境にありながらも熱意をもって業務にあたられ、利用者中心のサービスを実施されている姿にも感動した。日々のきめこまやかなレファレンスサービスはもちろん、文献検索方法の指導を行ってくださったり、実習において文献検索が特に必要となる特定の日については、閉館日であっても開館措置をとってくださったりと、ずいぶん助けていただいた。心から感謝し、御礼を申し上げたい。ハーバード大学の学長チャールズ・ウィリアム・エリオット Charles William Eliot が言ったように、図書館は大学の心臓部 the heart of the University である。十分なポンプ機能を維持され、本学の教育・研究に寄与されますよう、今後ますますのご尽力をお願いする次第である。

🌸 (寄稿) 私と図書館

社会福祉学部3年 榎本 浩司

「私にとって、図書館はどんな存在なのか？」

この県立大学附属図書館報の寄稿の依頼を受けたとき、ふと、そんな問い掛けが頭の中で起こりました。看護栄養学部棟図書室3階



私が図書館を利用する際、何を求めて利用しているのか、個人的な考えによるものですが、いくつか挙げてみたいと思います。

まず一番に考えられるのは、「資料・情報収集のための利用」ではないかと思います。おそらく、最も多くの方がこのような利用をされているのだと思いますが、私自身、レポート作成のための参考資料や講義の予習・復習のための資料探し等で図書館を利用します。特に県立大学の附属図書館では、学部に沿った専門書が多いので、他の公立の図書館よりも確実な資料を手に入れることが出来ると感じています。また、図書館に設置されたパソコンを用いての論文検索などは今後の卒論作成に向けて、これから多く利用したいと思っているツールの一つでもあります。

また、二つ目に私が図書館に求めるのは、「集中するための空間」です。基本的に図書館は、静かで落ち着いた空間を保っており、周囲に気を取られないため、目の前の本や課題に集中して取り組むことが出来ます。私はこの点を図書館に強く求めており、看護栄養学部棟に設置されている一人用の机は、まさに私が求める空間そのものです。特に試験前などは、短い時間の中でどれだけ目の前の課題に集中できるかが大切であり、もっとそのような一人用の机やスペースが増えてほしいと思います。

そして、私が三つ目に求めるのは「新しいものの発見」だと思います。特にこれといった探し物は無くても、図書館内を回っていると、必ず数冊予想していなかった本と出会います。「資料・情報を求めて」の利用というよりは、新しい世界に触れるきっかけを得るためにといったほうがいいのかもかもしれません。そして私にとって一番楽しい図書館の時間は、前に述べた二つよりも、格段にこの時間であり、このような利用の仕方は、生涯ずっと続けていけたらいいなと思っています。

以上のように、私は大きく分けて三つの目的で図書館を利用してきました。

最後に、実際に附属図書館を利用して感じたことを述べたいと思います。

簡潔に言えば、ハードとしての図書館は十分とはいえません。例えば本館の館内には、バリアフリーのトイレが設置されておらず、雨の日などはその点がネックになり図書館から足が遠のいてしまったり、館内は通路の幅が狭く、動きやすい環境とは言えない状況です。

また、要望としてですが、図書館内にゼミなどでディスカッションをしながら必要に応じて図書を探せるような空間があればいいなと思います。なぜなら、理系の学部が実験室で研究を深めていくように、文系の学部の実験室とは図書館ではないかと思うからです。そのような空間があれば研究もより深くなっていき、何よりも本との距離がとても近くなるように思います。

しかし、私が附属図書館を利用して印象に残っているのは、職員の方々が学生が利用しやすいように柔軟に対応して下さっていることです。私自身多くの場面で、ハード的に不自由な面を助けていただいています。

例えば、看護栄養学部棟の図書室を夜間利用していたとき、机の周りに電気配線が無く、机に備え付けられた蛍光灯を使うことができませんでした。しかし、それに気づいてくださった職員の方が延長コード等を利用して配線してくださり、



コーナーの机

私が次に図書館に行ったときには蛍光灯が使用できるようになっていて本当に嬉しかったのを覚えています。その他にも多くの場面で私が不自由な面に気づいて下さり、ハード的には利用しにくい環境を少しでも利用しやすいように対応してくださっています。今後も県立大学の附属図書館はこのような対応を是非継続していただき、色々な利用者にとって柔軟な図書館であってほしいと強く思います。

